

私の保育

宮下美智代

「木曾路は全て山の中である……」と藤村の文章で知られる木曾、そして今も「木曾谷」という。

木曾川にそって、まるで谷底のような所で、人が集まり街をつくっている。その中にある幼稚園——木曾幼稚園。木曾幼稚園が生まれた五十六年前、「幼稚園をつくりたいと思うが」という祖母の設置の願いに、「幼稚園とはいったい何だ、どういうものなのか」と問われたという。

しかしそれから半世紀後、幼稚園というものが、町の生活の中の一部となって、あってあたり前というものになって来た。人口一万という町の中で、その後保育所ができ、別に幼稚園もできて、今やこの町の一年生は、就学前にはどこかの園で必ず集団生活体験をすることになって来ている。

しかし、今思う。「幼稚園とはいったいなんだ、どういうも

のか」という、五十六年前の問いを今一度、考えなおすときではないか、と。

幼稚園とは何か。子どもあつての幼稚園、子どもあつての保育者である。子どもあつて、「私の保育」が書けるのである。しかし、子どもあつて、ということに甘んじている保育者、幼児教育関係者、そして私ではないか。

「子どもあつて」のために、私立幼稚園として幼稚園本来の使命を忘れ、子どももある（在る^カ集める）ことのみを力を使っている幼稚園が多すぎはしないか。子どもが、子どもの力を尽して生きる場としての幼稚園を、園長、教諭はどれほど心してゐるだろうか。

幼稚園とは何であるうか。(私はこのごろ、わからなくなつて来ている)

「誰も見ていないからといって、悪いことをしたとして、どなたかが見ていらっしやいますよ、それは神様(良心、心の神様、神)です。だから、人が見ても見ていなくても、悪いことはしてはいけません」と、創設者であり四十八年間毎日子どもと過ごし続けた祖母は、子どもにも生前こう言っていた。そういうなかで、そのことは、人間として守るべきあたり前のことと思つて来た。しかし大人の世界では、このあたり前のこと「正直に生きる」ということが、何と苦しくむずかしいことか。正直に生きて、あることないこといわれる世の中のむずかしさ、——しかしそれだからこそ、これからの世界を、町を、つくっていく子どもたちには、なお、正直に生きる、正直に生きることがまた世の中をもよくしていけるような、そんな在り方、生き方をしてほしいと思ひ、それで私たちは、幼児教育に情熱を傾けている。

教育というと、すぐ「どれだけ物を識しっているか」ということに結びつけたがる現在であるが、その知識を良くも悪くも使うのは、それを使う人間——個々の「人」にまかせられる。こ

の人——人格——というものをみつめながら、今、ここで、あたらしく、子どもたちと何を展開していったらよいのだろうか。

子どもたちは、朝のひととき、自由あそびと称する活動をもつ。これは「人との関係」「物との関係」のなかで、「自己のやりたいこと」を選び、決め、そして行なう、という、子どもにとっては大きな意味のある時間である。

入園して一か月になるこの朝も、子どもたちは活動を展開しはじめていた。そこへ門の塀のところから、おとなの声と風船がみえた。気づいて門の方へ走っていく子もある。八人のおじさんたちが手に手に風船を持って来園されたのである。「山の緑を大切に」「山火事を出さないように」等と、その風船には文字がはいっていた。山の中の木曾ならではのことである。(営林署と地方事務所の方々であった。)

子どもたちは風船のそばへ行き、いつもらえるのかという風である。おじさんたちは「山の木を大事にしてください。風船は先生にわたしますから先生からもらってくださいね」と。

子どもたちは今か今かと喜んでゐるが、私たちは迷う。「どうしましょう」

「降園時まで（わたさないというの）では、かわいそう」

「かといって、これ握っていたら活動ができないわね」

しかしそうしているうちにも、子どもたちは担任の手もとにくっついてくる。迷いながら渡す。渡しながら考える。子ども

たちは、風船をながめたり、まわしたり。そして体全体ではねる子もいる。私の手にも二つの風船。風の中で風船がゆれる。

高く手を上げれば風船はおどるかのようだ。おとなの私でも風船を手にもつてみれば、どこかうれしい。体をくると回転させたり、ギャロップをやってみた。

「あっ音楽!!」

「レコードかけたらどう」

「やってみましょうか」

昨年の運動会では園児全員で、表現集团的活動（園児、教職員でつくった物語、音楽、表現方法、演出で行なった）をしたことがおもしろい出され、私たちも胸がおどる。

レコードの方へ走っていく先生、やがて音楽がなる。体を私たちが動かしてみる。

「ああ、楽しいな」

子どもたちは風船を受けとると、ながめる、さわる、体全体で抱くようにしてみる、高く上げてみる……しかし体につけ

て、そのために動けなくなっていることも多い。しかし音楽がなると、ビョンビョンと両足のままとび上がってみる。年長組の子どもたちは、スキップも展開しはじめ。

「踊ろうか、小人さんになってみよう」

とリーダーシップをとる先生がいて、

「風が吹いて来たから、舞っていいのかな」

と状況設定をし、子どもたちの中に動きが生まれやすいようにつぶやく保育者がいる。それをみながら、踊る動きにのれないが、「ここで私は何の役割をとったらよいかな」と考えている保育者がいる。

こうした保育者集団の役割分担のなかで、子どもたちは流れる音楽に体をのせ、風船をゆらせ、踊る。バラバラに散在して体を動かしていた子どもが、一人の先生のうしろに次々とつながって、ハトがむれをなして舞うような場面も出現する。先生とは別に年長組の子どもたちも、五〜七人くらいでつながって園庭を動く。そして、一人で踊っている人も、その一すじの流れに出会い、つながっていく。

ふうせんを持って立っている人の横を保育者が通りぬける姿は、どうもトンネルかな。立っている人も活動に十分参加してゆけるよう、役割を与えているらしいな……とこちらから私は

その状況を推察し、では私はつばめにでもなつてそのトンネルをくぐつてみようか、と、そこへ走っていく……。

このようにして活動は十分から十五分くらい続き、子ども、保育者とも汗をかいて、満足して踊りながら部屋へとはいっていった。

計画外の予想もしなかつた風船も、幼稚園の保育活動の中に、こうして位置づけることができた。

ここで、「幼児の性格形成の基盤は、活動そのものの創造である。」(映画『かかわり』松村康平氏指導)を今いちど認識する。

風船という「物」と出会い、物媒介によって、「人」と共に行なう体験をし、「人」と出会うことができる。「物媒介、表現活動、集団体験」が風船によつてもたらされた。

こういう幼稚園の一コマにみられる活動から、子どもも大人の私たちも、学ぶ。

物との関係の中で、人との関係の中で、自己との関係の中で、そうした状況の中で、どう「ふるまい」を学んでいくか……この習得が、幼児教育の課題である。

そして、そこに参加する保育者にしても、子どもが音楽と風船の世界に楽しみ、そのことによつて、子どもによつて新しく

育てられ、子どものあとを追うかのように活動に参加していくことがあるということも、体験してとらえることができる。

新しく育てられる保育者、今いる人となかて、今いる子どもとの中で、発見できる保育者でなければ、「ふるまい」を学ぶ幼児教育の課題をとらえられない。

保育者自身の課題として「今、ここで、あたりしく」常にある。

「集団保育の主要な原理は三者関係である。三者関係的に関係をとりえてふるまえることが、集団活動の発展をもたらす」

(松村康平氏『幼児の性格形成』日本私立幼稚園連合会編より引用)

この「関係をとりえてふるまうこと」は、日々の刻々と展開される保育の中で、常に意識しようとしなければわからない。身につかない。「私はわからない」といい切ることによつて、わからう、考えよう、やってみようとする人との関係までくず

してしまい、新しいもの(発見するもの)を育てようとする保育活動にも背をむけることになることがある。この点はわからないけれど、この点では共にできる、という可能性を残した考

え方、物のいい方、ふるまい方を、私たち自身が課せられていと考える。

まわりも生かし、自分も生かし、そういう活動をより多く持とうとすることが、保育活動とつながってくる。「みどりを大切に」という風船も生かし、近隣社会と接在共存する幼稚園の幼児の活動も生かし、そして、私たち保育者もその活動によって生かされることのできる活動——この活動が生き、生きと展開されるよう配慮するのが保育者の仕事である。

物との関係、人との関係、自己との関係の中で、自己の活動をよりよいものにするという課題は、このふうせんばかりではない。(このふうせんについては、大きくふくらましたり、また小さくしほませたりして、これからの遊びのなかで「ゆめのふうせん」を想像させ、活動を創造させていけると期待している。ひょっとしたら秋の運動会の表現活動につながられるかもしれない)

幼稚園の活動はどこをとらえても、この原理がみつけれられる。例えば、二十日大根をまく。

。まいた種から芽が出ることを待つ。……(物との関係に於いて学ぶ)

。あ、芽が出ている」「でも僕のはまだ出てない」「なおこちゃんのは出てるね」「ウン、これ二つも出てるよ」……(人と

の関係に於いて学ぶ)

。「ほくのはまだ出ない。つまらないア、チュ!!」きつと「出なかったら泣きたくなっちゃうよ」と自分自身をなぐさめたり、こらえさせたりしているにちがいない。……(自己との関係に於いて学ぶ)

そうしているうちに、ほとんどの子の植木ばちに芽が出て来た。

「あっ今日僕の芽が出たよ」「フーン」「僕のなんか、こんなに大きいよ」「あれ、これだけ出てないアー」「まさるちゃん、水やった? 水かけてごらん、明日は出るよ」

物、人、自己との関係の中で学んでいく子どもたち。「性格形成の基盤となる子どもの活動」としての幼稚園の生活の大切さを痛感する。

たとえ二十日大根は小さくても、この発芽について友だちどうしでこんな会話が育っていると思えば、子どもの心の大根の根は大きいものであるにちがいない。発芽に何日かかったかを識るよりも「まさるちゃん、水かけてごらん。明日は芽が出るよ」という子どもの心を、私たちは大切にしたい。

子どもの生活、活動は、多くの者、多くの物と接在共存しな

から展開していく。

そのことを考えながら、幼稚園、子ども、家庭をつなげてみよう。

家庭連絡ノート「ハト」がある。このノートは、子どもの活動がより以上に展開されるために、家庭と幼稚園とが十日から十五日に一度通信をとりあう目的でつくられ、今年で十一年目になる。これは、私が在学中に出会うことのできた本『お母さんほくが好き』（松村康平氏指導 林昌子・のぶゆき著）から教えられ、はじめたものである。一年目は横がきにしたり、たてがきにしたり、内容もバラバラしていた。ノートに印刷するということも慣れず、ななめに印刷して読みにくい頁もできた。五年たつて少し「ハト」らしくなり、九年目頃、やっと今の「ハト」になった。どうも幼稚園からの連絡が多くなってしまいが、それでも必ずお家の方の欄をつくり、そこに返事や家庭からの通信を書いてもらう。

あるときは、子どもの逆境体験についてどう思いますかとたずねたときもある。お母さんは自分の子ども時代の体験を、そして我々子どもとのふれあいの実際を、それぞれのことばで記入してくださった。それに応えようと職員も一か月近くかかっ

てよみ、まとめ、そして討論しあって、五月頃にまとめ次号で家庭におしらせした。

こうしてハトのノートで、私たち保育者が、お母さんの体験を、今の子どもに期待することを学び、それを次回のハトに生かす。まるでボール投げのようである。私たちがボールを投げると、お母さん方がそれをにぎりかえしてこちらに投げ、また私たちがそれをにぎりかえして投げる、そしてまたお母さんから……と。

このにぎりかえしてやりとりするごとにあたらしくなるお母さん、あたらしくなる保育者、そして、大人がかわれば子どももかわってくる。

私たちの生活は流れのようである。子どもの成長もまた然りである。流れが自然であればそれだけに流れはとらえにくい。それを一年の流れとして一冊の往復ノートによって記録することができ。子供は変化発展し、成長するものだ（松村康平氏指導 お茶の水女子大学児童臨床研究室集団指導研究会）と私たちはお母さんたちに伝える。お母さんもそう理解してください。しかし、日々のくりかえしの中で、子どもの成長の一時点に於ける悩みや疑問も、これが永遠に続くかのような錯覚に陥り、また絶望的になることがある。そのときこのハトのノート

をめぐって、過去から現在への変化をとらえるとき、現在から未来への変化、成長をも信じて、変化、成長の方向への努力ができることを、一人の母親として私も体験した。

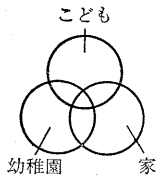
ハトのノートは、園児が各家庭手づくりの布製の袋にいれて「はいハトのおてがみ」と家庭に持ち帰る。家庭では一日、二日の間にこれをよんで感想やたよりを書いて園へもどす。これをまた教職員がよみ、職員会の話題とし、次のハトの原稿にとりかかる。私たちは、子どもをみる目を変えさせられたり、行事のやり方にも修正を加える。家庭からの返事に、一つに喜び、一つに反省し、一つに悲しみ、一つに笑いこらげる。

ここに私たちの「発見」がある。これによって、保育に向かう私たちも新しくなるのである。

お母さん方からは、「ハトのくるのが楽しんだ」といわれる。私たちも、お母さんの返事が楽しみである。ある時お母さんから「先生たちだって、私たちの返事をよむのが楽しみでしょう。私たちも先生方の返事を待っているんです」とやられ、あわてて、せっせと返事を書くようなこともあった。

「ハト」を手にするとき、常に「子ども」が意識される。家庭に於いては、子どもが寝静まった後、母親が子どもをおもい

ながら、ハトの返事を書くのであろう。



上図のような接在共存の関係を認識させてくれ、具現化した「物」として、ハトノートの存在は木曾幼稚園に於いては大きい。

はじめ七十円の大学ノートが、印刷され返事がかきこまれ、また印刷され……となって、一年たつとすでにお金では買うことのできない物に変わってしまった。「人」の手によって「物」が大きく変えられている（価値あるものに）。「ハト」を子どものために一生とっておいてやりたいと言われる方も多い。

子どもの生活は、多くの者や物と接在共存しているが、特に母親、そして幼稚園（子ども、子どもたち、先生たち）との接在共存する部分は大である。この三つを一つにつなげる「物」があつて気づき、「物」ではとらえ切れない人間の活動へと、大きく広がってくれることを願って、またハトの次の号を書いている。

「性格形成の基礎づくり」にかかわる私たちである。

「かかわりかた」を学びながら、生きたい。（木曾幼稚園）